感染症とともに生きる

●企画／堀 成美（感染対策ラボ 代表）

知って防ごう帯状疱疹

高齢者の生活を脅かす痛み

執筆者

織田 錬太郎

おだ れんたろう

東京都立多摩総合医療センター 感染症内科 医長・診療科長

2008年順天堂大学医学部卒業。感染症専門医。東京ベイ・浦安市川医療センター感染症内科部長を経て、2023年より現職。臨床現場で幅広いジャンルの感染症を診断・治療し、医師の教育や疾患の啓発に努めている。

帯状疱疹という病気をご存じでしょうか。聞いたことはあっても、どのような病気かピンとこない人が多いかもしれません。

帯状疱疹の原因は水ぼうそうのウイルスです。このウイルスは子どもの時に感染すると、免疫で抑えられて長期間体内の神経に潜伏します。若くて健康な時は問題ありませんが、加齢や病気の治療などで免疫が低下すると、抑えられていたウイルスが再度活性化し、潜伏先の神経に沿って増殖して皮膚に病変を作ります。病変は神経に沿って現れるため、通常は左右どちらかの皮膚に偏って「帯状」に出現します。これが帯状疱疹です。

◆◆◆

帯状疱疹で直接命が危険にさらされることはほとんどありません。では、発症すると何が一番困るのでしょうか。それは痛みです。神経に炎症を起こすため、多くの人で神経痛が生じます。急性の神経痛は多くが1カ月以内に治りますが、一部では3カ月を超えて持続してしまう場合があります。これを帯状疱疹後神経痛と呼び、帯状疱疹の最も深刻な合併症の一つです。痛みの種類は、焼けるような熱さ、痒み、鋭い痛みや刺すような痛みなど多様で、中には軽く触れるだけでも痛い、通常は痛くないような刺激でも痛みを感じるといった特徴的な症状が出る人もいます。長い場合は年単位、時には一生治らないこともあります。このような痛みが日々、場合によっては長年続くことを想像してみてください。生活の質が著しく低下することは容易に想像できますし、実際にうつ状態になってしまう方もいます。顔に発症すると食事が困難になる高齢者の方もいます。

◆◆◆

帯状疱疹は生涯で3人に1人が経験する非常に頻度の高い病気で、世界的に増加傾向にあります。決して他人事ではありません。一度発症すると帯状疱疹後神経痛のリスクを負うことになります。そこで予防の手段として重要なのがワクチンです。

帯状疱疹のワクチンは従来、生ワクチン（ウイルスを弱毒化したもの）でしたが、免疫の弱い人には接種できないというデメリットがありました。約10年前に不活化ワクチン（ウイルスの病原性を無くしたもの）の高い有効性が証明され、日本でも2020年から接種が可能になりました。この2種類のワクチンはいずれも帯状疱疹と帯状疱疹後神経痛の発症を減少させる効果が実証されています。

世界的に推奨される接種対象は、健康な50歳以上の人や、病気で免疫が低下している18歳以上の人です。ただし、費用面での負担が課題となっており、日本ではこれまで一部の自治体による補助にとどまり、接種が十分に普及していない状況でした。しかし、厚生労働省が2024年12月に開催した専門部会で、2025年4月から65歳以上を対象に帯状疱疹ワクチンを定期接種化することを決定し、昨年末に各メディアが一斉に報道しました。

◆◆◆

前述のように、接種対象となる高齢者は発症リスクが明確に高い集団であり、発症した場合には帯状疱疹後神経痛による苦痛だけでなく、痛みの場所・程度や入院による影響で生活の質や活動度が低下し、間接的に生命に関わる可能性も十分にあります。

さまざまな帯状疱疹の患者さんを臨床現場の第一線で診療してきた立場から、「先生が同じ年齢なら接種しますか？」と聞かれれば、迷うことなく「はい！」と答えます。対象となる方には接種を積極的に検討していただきたいですし、ご家族に対象者がいる場合にもおすすめしたいワクチンです。